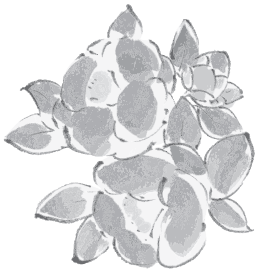
したら（注視とみなす）、そこにあるキーを入力するものです。そして、次の画面にすばやく転換します。博士もこれを試したでしょうが、当時はまだ実用性がなかったのでしょう。この方式では、本人はディスプレイ上のモノをすばやく見つけ、その一点に正確に視線を向け、そこで固定することが求められます。健常者ではこれを無意識に速く正確に行っていますが、実はこれは脳神経系総体を使って遂行する高度な作業です。肢体不自由があれば、この機能が健常者と同等であることはまずないと思うべきです。私たちも重症肢体不自由児に対する視線入力装置の使用経験がありますが、この問題を痛感しています。このため、本人が装置の誤認識を学習して自己の眼球の動かし方を修正すること、装置がその人の視線運動・注視パターンを学習して視線認識精度を高めること、この両者が必要でしょう。現状では、こうした学習過程を経た視線入力装置が最も有望な意思伝達装置であろうと私は考えます。なお、この他に脳波を導出して意思伝達につなげる試みもされていますが、その実用性は相当先の話と私は思っています。

意思伝達の仕方を考える場合には、まず意思が先にあります。例えば、ホーキング博士の伝えたい意思と生後3ヵ月の乳児の伝えたい意思はまるで違います。これまで述べたのは、ホーキング博士ほどでないにしても、そのような創造的な意思の伝達法についてです。一方、3ヵ月児では、自分の存在を母に向けたいというのが意思の主なものであろうと私は考えます。この場合は、その子の表情・まなざし・発声・体動の意思伝達手段で何も不足はないと思います。こうしてみると、文字を獲得した重度肢体不自由児者に対し意思伝達装置は精力的に試みるべきと考えます。また、こうした小児には、文字習得は重要な課題と考えます。



横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の３項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1−C，B2，D2−U，B5−B，C4−D

〈知的発達〉

E6	E5	E4	E3	E2	E1	簡単な計算可
D6	D5	D4	D3	D2	D1	簡単な文字・数字の理解可
C6	C5	C4	C3	C2	C1	簡単な色・数の理解可
B6	B5	B4	B3	B2	B1	簡単な言語理解可
A6	A5	A4	A3	A2	A1	言語理解不可
戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可	

〈移動機能〉

＜特記事項＞
C：有意な眼瞼運動なし
B：盲
D：難聴
U：両上肢機能全廃
TLS：完全閉じ込め状態

だいちの日常活動

仲山　利恵

Aさん（横地分類B6）は、オーディオから聞き馴染みのある曲が流れてくると、その曲のワンフレーズを口ずさむことがあります。また職員が歌いかけると、手の平をひらひらと振ってリズムを刻みながら聞いていることがあります。リズムに合わせて色や形が変化していくものに興味があるのではないかと考え、リズムに合わせた点つなぎや色塗りを見る活動をしました。数を数えながら番号のふられたところに色が塗っていくとAさんは、数を数えるリズムに合わせて頭を揺らしていました。最後まで色が塗られていくのは見る事はなく、数えているリズムに合わせて体を動かしているだけでした。そこで、点と点をつないで絵が描かれていく〝点つなぎ〟を行ないました。「いーち、にーい」と数を数えながら点と点を結んでいくと、Aさんは始め、数えるリズムにのって体を揺らしていました。だんだんと線が繋がっていくと、今度はのぞき込むようにして描かれていくのを見始めました。線を繋ぎ終えた絵に色を付けて完成させると、Aさんはそれを頬笑みながら見ていました。出来上がった絵に色が付いていくのも面白いようでした。一つ一つの点がリズムに合わせて繋がっていき、絵が現れていくことが面白いようでした。

Bさん（横地分類A5）は、リビングで他の利用者が語りかけを聞いていると、側に来て表情緩めて聞いていることがあります。特に「たいへんだ、たいへんだ」など捲し立てるような勢いのある口調や「おんちょろちょろ」などの面白い言い回しのある語りかけを可笑しそうに口元緩めて聞いています。また職員同士が申し送りで話し合っていると近づいて、聞いていることが